



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES
Newsletter

第47号

URL=<https://www.aasa.ac.jp/institution/igws/index.html>発行年月日: 2019年3月10日
〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9
Phone 0561-62-4111 ex.2498
FAX 0561-63-9308
E-mail: igws@asu.aasa.ac.jp

IGWS 第47号ニュースレター目次

○第36回定例セミナー報告	1・2
○第36回定例セミナー学生感想文	3
○「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習」第2回成果発表公演のご報告	4
○第12回「ジェンダー視点の卒業論文・卒業制作」報告会	5
○エッセイ: 対人支援に“personal is political”の視点を	6
○エッセイ: 学生たちの作品に描かれるジェンダー	7
○ランチタイム研究会を開催しました	8

2018年11月20日に、第36回定例セミナー「多様な人材、多様な働き方が、会社と社会のステキな未来をつくる！」を開催しました。以下、その概要をご報告いたします。

第36回定例セミナー

多様な人材、多様な働き方が、会社と社会の
ステキな未来をつくる！

講師 下方 敬子さん
(株式会社デンソー常務役員)



今回のセミナーでは、(株)デンソー常務役員の下方敬子氏を講師としてお招きしました。下方氏は薬剤師免許取得後、結婚、出産を経て医学部入学、博士号取得。2001年デンソーに産業医として入社し、社員の健康管理に携わり、2015年1月より健康推進部長、同6月より常務役員就任、ダイバーシティ推進・健康推進部・安全衛生環境部担当及び障害者雇用に取り組む(株)デンソーブラッサム社長も兼務。愛知県「あいち・ウーマノミクス研究会」の構成メンバーでもあります。

はじめに、ダイバーシティ(多様性)とは何か?について。下方氏からは、性別、国籍など目に見える違いのほか、価値観や経験といった目に見えない違いも尊重し大切にする「ダイバーシティ(多様性)&インクルージョン(包摂)」がデンソーの目指すところだとのこと。今の時代、自動車業界も家電、IT企業とも競争せねばならず、企業の生き残りのためには、多様性を大切に切磋琢磨できる優秀な人材が必要なのです。

ここでデンソーの紹介です。世界で17万人の従業員を抱える大企業であり、1949年に(株)トヨタ自動車(旧トヨタ自工)から独立し、いまでは世界中に車の部品を供給する以外に、エコキュート、バーコー



多様な人材、多様な働き方が、会社と社会のステキな未来をつくる！
講師: 下方 敬子
(株式会社デンソー 常務役員)
主催: 愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所
協賛: 愛知淑徳大学キャリアセンター



ドリーダー、駐車場の自動認証、農業の温室自動制御、手術室の集中モニター、QRコード（特許商品）、将棋ロボットなど、挙げたらきりが無いほどの製品を扱っているそうです。

デンソーが掲げる多様性のミッションの1つ目に、障害者の活躍への取り組みがあります。1960年に身体障害者雇用促進法の成立にともない、蒲郡市にある(株)デンソー太陽で定期採用を始め、2016年にはデンソーブラッサム（特例子会社）を設立しました。デンソー本体では聴覚障害者も多く働いており、緊急時には大型のパトライトで危険を知らせる、腕時計型バイブレーションで注意を促す、などの配慮があるそうです。社内には手話サークルもあり、アピリンピック（全国障害者技能競技大会）でもメダリストを多く輩出しています。採用のために学校訪問や会社見学、職場実習も実施しており、親子で参加される方も多いそうです。

2つ目のミッションは女性の活躍推進。女性の就業率はライフイベントでの離職を反映して「M字カーブ」を描き、再度働くとしても非正規雇用が多く管理職は少ないのが現状です。日本の女性就業率は先進国では最低レベルであり、特に中部地域、愛知県はM字カーブが深いといわれます。経済活動における消費者としての多数の女性に対し、女性目線での事業活動は必須であり、多様な価値観を持つ相手に商品売るためには、会社にも多様性が必要で、企業戦略として女性の活躍推進は大切です。政府、地方自治体も女性の活躍推進をバックアップしており、デンソーは「ダイバーシティ経営企業100選」（経済産業省）にも選ばれたそうですが、残念ながら愛知は女性活躍に対して活性が低いようです。デンソーもまだ女性管理職は少なく、その母数を増やすために女性の雇用自体を増やし、「長く働き続けられる会社へ」を目標に、育児期の支援、社内保育所、配偶者の転勤で退職した社員の再雇用などを行っています。さらに、社長自らのメッセージとして、女性活躍推進に向けた会社の思いを語ってもらい、キャリアを考えるフォーラム企画、女性リーダー間のネットワークづくりやロールモデルの提示、機関紙も発行し、女性の意識改革に努めるとともに、テレワークの拡大、終日在宅・社外勤務など、さらなる働き方の柔軟化を拡大しているところだそうです。

下方氏は、薬剤師になったときは今のキャリアを全く考えておらず、いろんな偶然が重なって今があるとのことでした。一般的に女性は出世欲がなく自己評価も低めな傾向がある。自分もいつも本来の自分より1

メートルくらい前に他者からの評価像があり、そこに追いつくために頑張ってきた。今までやってきたことはすべて今の自分に役立ち、実になっていると思うが、それもこれもみんな周囲の人達のおかげだと感じている、とのことでした。

質疑応答での「出産・育児と仕事の両立は大変。どのように乗り越えましたか？」という質問に対しては、自分は両親が近くにおり助けてくれたが、子供と一緒にいる時間は少なかったとのこと。今は男性も育児休暇を取るよう勧めており、3日や1週間、1か月でもいいから、育児を通してパートナーと時間を共有してほしいと思っている。景色が変わることで、見えない多様性にも気づくのではないかと考えている、とのこと。

「女性の目線からみて経営陣、社員のダイバーシティへの理解はどうか？」という質問には、部署ごとに現実的には難しい点もあるが、概念は皆理解しており、具体的な手段を提供するのがダイバーシティ担当部署と自分の使命であるとのこと。

「デンソーがダイバーシティを風土とできた要因は何？」という問いには、女性管理職の頑張り、それがロールモデルになっている。また女性を管理職に上げ、サポートした男性上司がいたことが大きい、とのことでした。

ウーマノミクスの波に乗ったとはいえ、大企業の常務役員に抜擢されるにはそれなりの業績が認められたということ、それを「すべて偶然、周囲の人のおかげ。」と言い切ってしまう下方氏の懐の大きさを感じました。多様性の時代、みんな違っていい。デンソーがステキな未来に向けたダイバーシティの流れを牽引してくれることを願います。

(文責 IGWS 運営委員 前田 恵子)

愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所主催 第36回定例セミナー

多様な人材・多様な働き方が、会社と社会のステキな未来をつくる！

ダイバーシティとは、「多様な価値観」を大切にすること、一人ひとりを思いやる「温かみ」を育むこと。今回のセミナーでは、企業のダイバーシティの実践について、女性・障がい者の活躍支援を中心にお話を伺います。

講師
下方 敬子 さん
(株式会社デンソー 常務役員)
岐阜大学医学部卒、国立名古屋病院（現名古屋医療センター）等で循環器科医として病院勤務後、名古屋大学医学部に医学博士取得。
2001年4月株式会社デンソー西尾製作所専属産業医として入社、社員の健康管理に携わり、2015年1月より健康推進部長、同6月より常務役員就任。ダイバーシティ推進・健康推進部・安全衛生環境部担当及び株式会社デンソーブラッサム社長兼務。

日時&場所
2018年11月20日（火）
13:30-15:00
星が丘キャンパス1号館
15A教室

入場無料
どなたでもご参加いただけます！

◆主催・問い合わせ先
愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所 長久手キャンパス 8号棟4階
Tel: 0561-62-4111 内線2498 E-Mail: igws@osu.aasa.ac.jp
http://www.aasa.ac.jp/institution/igws/index.html

◆協賛
愛知淑徳大学キャリアセンター
◆ポスター制作
愛知淑徳大学 創造表現学部 3年 小木園実穂

学生感想文

小出 栞菜

セミナーを通し、多様な人材を登用し、それに合わせた多様な働き方のできる会社にする必要性について学ぶことができました。少子高齢社会となる日本で労働力確保は必須です。また、ニーズや市場も時代によってかわります。そのため今まで男性健常者が引っ張ってきたとしても時代の変化に合わせて会社の制度を見直して行く必要があると知りました。

デンソーさんでは多様性を大切にし、障がい者や女性が働きやすい職場となるよう様々な工夫がなされていました。

障がい者のために安心・安全な職場となるよう会社が設備を整えるだけでなく、職場の構成員自らが自主的に障がい者のために改善する配慮や思いやりを持っており、働きやすい場とはみんなで作るものなのだと気がつきました。それは会社の雰囲気にも繋がると思うので、ダイバーシティを推進することの大切さを感じました。

女性活躍の面では、女性は結婚や出産といったライフイベントによってキャリアを諦めることが多い中、デンソーさんでは女性が長く働き続け、女性リーダー

として活躍できる工夫がなされていました。特に印象的だったのは女性リーダー間のネットワーク作りです。女性の管理職は限定的であり、母数自体が少ないため同じ女性に相談したいことがあっても周りが男性ばかりでは難しいです。女性間でネットワークを作ることにより、同じ環境にある女性同士で相談ができることはとても心強いと思います。また、自分以外にもリーダーとして活躍する女性がいると知ることはモチベーション向上にもつながります。そうして成功した女性を推進力として女性がますます活躍することのできる会社になると思いました。

また、消費者は男性だけでなく女性もいます。女性の目線からであったからこそ作られた製品もあるとのことだったので、多様なニーズに応えるためにも女性をもっと活躍しなければならないと思いました。

女性活躍の大切さと、柔軟な視点で多様な人材を受け入れて、育てることのできる会社にする大切さが非常にわかるセミナーでした。そして、私はそんな多様性を大切にする会社に就職したいと思いました。

(交流文化学部交流文化学科2年)

村瀬 明里

今回の講演は、自分の将来像を見直すきっかけになりました。なぜなら、講師の方のお話で自分がずっと固定概念に縛られていたことに気づくことができました。私は今まで、女性は家庭を持つと仕事を辞めるのが当たり前と考えていました。女性は家事、男性は仕事という性別分業に違和感すら感じていませんでした。しかし、女性管理職として働いている講師の方の体験談を聞いて、考え方が変わりました。結婚・出産といったライフイベントを迎えた後に仕事を辞めるという考えから、仕事と家庭を両立したいという考えへと変化したのです。この考え方の変化は私の未来像を見直すことに繋がりました。

では、仕事と家庭を両立するにはどうすればいいのかと考えました。自分だけの力ではどうにもなりません。やはり企業のダイバーシティの推進が重要であると考えます。講演でも、女性や障害者のような多様な人材を雇用するための対策だけでなく、みんなで働きやすい環境をつくりあげることが大切とありました。働きやすい環境がないと女性が能力を十分に発揮できないという話を聞き、もったいないなと思いました。

能力を持っていながら、それを発揮できていない女性は多くいると思います。

そこで、次にどうすれば女性が活躍できる環境が整うのだろうかと考えました。私は企業の対策と女性の意識の両方が必要だと思います。企業が対策を取り企業全体で働きやすい環境を作ることは必須です。それに加え、今まで活躍を期待されてこなかった女性たちに働く意欲をもってもらうことが必要といえます。そのためには自分がまず意識を変える必要があるなと思いました。女性目線での意見が重要視されるなど、女性の社会進出がもっと必要であること。仕事と家庭の両立は不可能ではないこと。ダイバーシティに取り組む企業があること。このように今回の講演で沢山の情報を吸収したことで、自分の仕事への意識が変わったことを自覚しています。

これから就職活動が始まろうとする中で今回の素晴らしい講演を聞くことができました。就職先を決める際には企業のダイバーシティの推進を重視し、働きやすい環境のある企業を選びたいです。

(交流文化学部交流文化学科2年)



「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習」第2回成果 発表公演のご報告 パレット～まじる、まぜる、まざる。～

本学の全学共通履修科目「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習Ⅰ・Ⅱ」は、演劇の創作をとおしてジェンダーを学ぶ、特色ある科目です。昨年度に続き、この授業に賛助教員として関わってくださった石河敦子先生（本学非常勤講師）に、今回もレポートをお願いしました。



昨年に引き続き参加させていただきました。担当は、本学創造表現学部教授の角田達朗先生、劇作家・演出家で本学非常勤講師の刈馬（かま）カオス先生、振付家で本学非常勤講師の山田珠実先生の3名です。昨年発行のIGWS ニュースレター第44号（2017年10月発行）では授業内容をご紹介しました。今号は劇づくりのプロセスを中心にご報告します。

前期授業（Ⅰ）では、主に次のような課題が出されました。「ジェンダーとは何か」について調べてくる、「あなたの性別は何ですか」を問うことで展開する会話を記録してくる、ジェンダーにまつわるエピソードを自分の生い立ちから掘り起こすための年表づくり、だれかへの手紙を書く。以上は学生向けの課題ですが、わたしを含めた教員全員にも課題がだされました。ジェンダーやセクシュアリティについて個人的に思うことや立場について語るといふものです。教員向けの課題を通じて、わたしも個人としてフェミニズムとの関わり、フェミニズム運動が何かというお話をしました。

各教員が順番に、授業のはじめにこのように個人的なジェンダーやセクシュアリティとの関わりやそれについて思うことを語ることは、そうした語りを通じて教員と学生がともに学ぶ場を共有していることを、そこに居合わせた全員が確認する意義をもつと思われます。

さて、学生から提出された年表や会話ですが、そのままでは劇にはなりません。たとえば年表を用いた劇づくりでは、年表のサンプルが山田先生から提示され、4～5名のグループに分かれ、そこに書かれたひとつのエピソードをもとに劇をつくる体験をしました。ここで作った劇を実際に上演したわけではありません。のちに出される課題（性別にまつわる困難について、性暴力について、アイドルについてなど）から劇づくりへ結び付けたのですが、それがこのワークの応用編です。

刈馬先生がファシリテートしたシアターゲームではだれもが異なった価値観をもち、他者の価値観を推測することがいかに難しいかを実感したり、たえず体を動かしながら声やジェスチャーを使って自分の意思を伝える訓練をしたりしました。

シーンの発表のたびに、先生方の細かい演出指導がありました。スマホで撮影したものをそれぞれが自宅で見ながら台本にしたり改良したりしていきました。

最後に、完成した舞台の内容についてほんの少しふれておきます。オープニングでもエンディングでも手紙が読まれました。どちらもテーマは「女の子」。それぞれ「お母さんへ」の手紙と「おじさんへ」の手紙です。「女の子」と名指されることにどこかで立ち止まったり、疑問や違和感を覚えてきたりした学生たちがいます。疑問も違和感もことばで説明することは難しいことですが、これらのシーンを練習から繰り返し見るうちに演出効果



もあいまって、じつにうまくとらえたものだと何度もうならされるシーンとして仕上がっていきました。

上演直後に「こんなふうにも『違いを共に生きる』って学べるんですね」とある参加学生が感心していました。学生たちは今回も試行錯誤でまじったり、まぜたり、まざりながら、それぞれの可能性を見せてくれたことは確かです。

（文責 本学非常勤講師 石河 敦子）



第12回 「ジェンダー視点の卒業論文・卒業制作」報告会 開催

2019年1月24日（木）長久手キャンパス432教室

1月24日（木）に、第12回「ジェンダー視点の卒業論文・卒業制作」報告会を開催しました。今回は、メディアプロデュース学部（現：創造表現学部）から都市環境デザイン専攻の学生が初めて参加するなど、さまざまな学部・専攻からの参加があり、総合大学ならではのバラエティ豊かなテーマのラインアップとなりました。

15分という短い時間ながら、それぞれに思いのこもった発表が続き、質疑応答や茶話会の時間も活発に意見交換が行われました。以下に報告者をご紹介します。



若年層における脳についての総合的考察

福祉貢献学部福祉貢献学科 天草 美樹



「ジェンダーレス男子」現象とは何か

交流文化学部交流文化学科 久木田 祐実



足立産婦人科リノベーション

メディアプロデュース学部メディアプロデュース学科 前川 梨紗



ジェンダーと若者～インタビューにもとづくドキュメンタリー映像の制作～

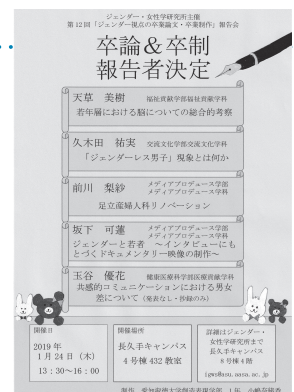
メディアプロデュース学部メディアプロデュース学科 坂下 可蓮

共感的コミュニケーションにおける男女差について（※ポスター発表）

健康医療科学部医療貢献学科 玉谷 優花



報告会のあとの茶話会
も盛り上がりました。





対人支援に “personal is political”の視点を



中村 亮

私は現在、大学院の修士課程で臨床心理学を学んでいます。具体的には、実践や講義、研究を通して、心理職としての視点や心構え、カウンセリングの技法、支援の際に依って立つ理論や知識を学んでいます。

対人支援の現場において、私たち心理職の役割は、カウンセリング等の支援活動を通して、個人が社会に適応しながらも、その人らしく生きられるようお手伝いをする事です。そのため、私たちはその実践において、社会での適応とは何か、その人らしさとは何かを常に考える必要があります。それについて私が感じることは、私たちが「社会適応」や「その人らしさ」について考えるときには、個人が語る文脈やその人の置かれている社会に埋め込まれているジェンダーについての敏感さと理解が求められるということです。

私たちの役割は、その人が社会規範に則って生きていけるよう働きかけることでもなければ、支援者としての私たち自身が思う正解に導くことでもありません。それがどのような選択であれ、個人が主体的に自己決定する過程を支援することが私たちの仕事です。しかし、主体的な自己決定を行うために、個人が本来持っていた能力や尊厳、権利、可能性を回復していく過程で、私たちは、それらのさまざまな力が、一体何によって損なわれていたのか、という“personal is political”の視点でその人の置かれている社会的状況や立場を理解する必要があります。そして、その社会的文脈には、可視化されないジェンダーが埋め込まれていることが多分にあります。それは、広い視点で見れば同じ社会で生活している私たちの視点や、私たち心理職が依って立つ理論や技法にも組み込まれています。そのために、私たちのような対人支援職には、特にジェンダーについての敏感な視点と理解が常に求められていると感じています。また、そのような可視化されづらい性差別的な社会構造や権力関係について検討することも、人々のメンタルヘルス向上における私たちの重要な課題であると考えています。

私は現在、修士論文研究において、「女性が性的な客体として消費されることに許容的な社会文化を形成・維持している要因についての検討」をテーマとして、「他者から性的に消費されることが、女性の価値観やメンタルヘルスに及ぼす影響」について調査しています。このようなテーマに行き着くには、私のこれまでの多くの経験、つまり「個人的なこと」の積み重ねがありますが、そんな中でも、これがきっかけであると明確に言えるエピソードが二つあります。

一つは高校時代、友人の女性が、「電車で痴漢されたことのない自分は、女として価値がないのかな」と

話したことです。私がとても尊敬する友人が、そのように考えて心を痛めているというのを聞いて、私自身もとても悲しく感じました。今になってみれば、「そんなことであなたの価値は決まらない」と、そう言えればよかったです。ですが当時は、私自身、その言葉にどう答えるべきかわかりませんでした。

もう一つは大学で、友人の男性が自らの交友関係を振り返る際に、「自分は女性の容姿をみて態度を変える男性をよく思わないし、それは女性にとって失礼なことだと思う。だから、自分はどんな女性とでも交際する可能性があると思って接している」と話したことです。よくよく話してみると、彼の今までの交友関係において、ほとんどの男性は「女性を付き合えるか付き合えないかで振り分けて態度を変える人」であり、その交友関係、彼の言うところの「男性社会」の中で、彼の「女性を1人の人として尊重している」という思いが受け入れられるように表現した結果が、先ほどの言葉であるのだと理解しました。この話を聞いて、最初こそショックを受けましたが、彼の話を聞いているうちに、彼が感じている「男性社会」での生きづらさや、先ほどの言葉遣いにみられるような、そこで適応していくための彼の努力があったことを想うと心が痛くなりました。

以上の2つのエピソードで、私や私の友人たちが感じた「生きづらさや悲しさ」という個人的なことを、“personal is political”の文脈にのせて眺めてみると、「一体何が私たちを悲しませているのだろう」、「彼女達にその言葉を言わせたものは何なのだろう?」という考えが浮かんできました。同時に、その正体不明の原因に対しての怒りも湧いてきました。このような個人的な体験に根ざした感情や考えから着想を得て、現在の研究テーマに至りましたが、この時感じた悲しみや怒りは、単なるきっかけとなっただけでなく、現在の研究活動の大きな原動力にもなっています。

私は現在、修士課程の2年生ですが、修了後はスクールカウンセラーとして対人支援の現場に携わる予定です。現場での実践はまだ想像できませんが、そこで出会う人々の個人的な感情や体験に寄り添っていくことが、心理職としての私の支援の第一歩なのだと考えています。そして、そこで出会った「個人的なこと」について、“personal is political”の視点で考えることで、さらに多くの人々の幸福に貢献できるよう努めたいと思います。

(2016年度心理学部心理学科卒業)
(名古屋市立大学大学院 人間文化研究科
博士前期課程臨床心理コース)

エッセイ

学生たちの作品に描かれるジェンダー



TOFF Mika

私は、ゼミの授業でライフライティング (life writing) の指導を行なっている。日常の手紙、日記、SNS やエッセイを書くなど、自分を書いて表現することを、このゼミでは英語で行う。

英語が話せるようになりたいと思う学生が多い中で、このゼミに来る学生たちは、書くことによって考えを深めたい、とっさに話すのは難しいが、書くことによってなら、自分の言いたいことをじっくりと考えることができる、と言う。そして、日本語では言えないことも、英語でなら躊躇せずに言えるということがある。

学生一人ひとりには今まで歩んできた人生があり、それを卒業前の最後のプロジェクトとして英文 30 ページ余りの作品にまとめあげていく。とはいえ誰もが最初からそんな大作を書けるわけではない。

まずは、毎日の出来事や、家族や自分の町についてといった日常を英文で描写していくことから始める。その文章の中に映し出されるものは、自分と家族との関係や、自分のアイデンティティを作り上げてきた土地柄など、学生一人ひとりの個性に他ならない。当然、英語という第二言語を使って書き表していくわけだから、母語よりも時間と手間がかかる。長い時間をかけて深く考え、自分の個性について自分の言葉で描写して、自分を客観的に見ていく。それまでは自分でも気が付かなかった自分に出会い、学生たちは書き進めるにつれて様々な発見をしていく。その手助けをするのが私の役割で、クラス内でディスカッションをしたり、時には一対一でコンピュータの画面を前にして、語彙と一緒に選んだり、表現を模索したりしながら内容を整理し、深めていく。

ここで、学生たちが書き表した様々な作品の中から、その中に現れたジェンダーに関するトピックをいくつか、日本語に直して紹介したいと思う。

幼少時から女らしい髪形や服装が期待される

「子供の頃、髪が短いから近所のおばあちゃんに男の子と間違われて『ぼく』と呼ばれた。小学校でも髪の短い女の子は私だけで、男が女の制服を着ていると言って男の子にからかわれた。みんなに女の子らしくしなさいと言われていたようで、必死になって人の陰に隠れるようになった。他の女の子たちが好む音楽を聴き、女の子の遊びをし、女の子の着る洋服を着てみたが、楽しくなかった。髪を伸ばしてみようかと思うと友達に言ったら、その友達が、短い髪があなたらしくていいと言ってくれて心が温かくなった。それでも母は、男の子に間違われぬ様にとピンクの服や小物ばかり買って来た。ピンクのものに囲まれて、次第に息苦しくなっていた。」

言葉遣いも女の子らしくと育てられる

「両親は女の子らしい言葉遣いをしなさいと言ったが、兄と喧嘩になると負けたくないから男の子と同じ言葉を使った。小学生になって、相手を傷つける言葉を平気で投げかけてくる男の子に、男言葉で言い返した。女がそんな言葉遣いをするのは変な感じと言われ、

言葉遣いを意識するようになった。でも大人になって、女性らしい話し方と綺麗な服装と、料理上手が『女子力』と言う話になると、私はそんな女子力の基準には当てはまらなくていいと感じるようになった。」

結婚と子育てか仕事での成功か

「子供の頃は、大人になったらみんなと同じように結婚して子供を産むものだと考えていた。結婚したら仕事を辞めて夫の世話をし、子供が生まれたら子供の世話をするのが女にとっての幸せだと思っていた。しかし大人になるにつれて、結婚だけが唯一の幸せではないのだと思えるようになると、沢山の選択肢と自由を想像できるようになり心が軽くなった。そこで、仕事をして将来自分のマンションを買いたいと両親に話してみた。母は驚いて、そんなことを考えていたら、いつ結婚するのだと言った。女は仕事で成功することなど考えなくていいと言った。父も母から話を聞いて笑った。真剣に仕事のことを考えているということも伝えなかったのに、わかってもらえなかった。」

こうした話を一つ一つ書き表しながら、学生たちは女性や男性に対する日本社会の持つ期待や固定概念などを振り払い、自分の人生を自分で決めていくようになる。世間一般の考えをちょっと疑問に思ってみることにより、いろんな選択肢が見えてくるようになる。そして人に伝える力を養い、伝えることによって自信をつけていく。

最後に、自分自身を客観的に見ていくことで、母親の呪縛から逃れた学生の例を紹介したい。

母親からの自立を真剣に考える学生

「知らない人と話するのが苦手だと思っていたが、同じ年代の人とは話ができる。よく考えてみると、大人と話するのが苦手なのであって、それは子供の頃から母親に対して意見を言わせてもらえなかったからだということに気づいた。子供の頃から、私が話す場面でも母が全て話してしまった。いつまでたっても大人と話せるようにはならなかった。そして母は、全部自分で決めてその通りにさせる一方で、お母さんに頼ってばかりで自立できていないと批判をした。」

大学生になり、彼女は様々な活動に参加し、大人と話す機会を作っていた。そして母親とのエピソードを文章にしながら、束縛を一つ一つ解き、自分の人生を作り上げていく過程を確認していった。母のせいにしなくてよくなったなら、自分にできることが沢山見えてきて、自分を肯定的に見ることができるようになった。自分の言いたいことをきちんとと言えるようになったら母親との関係もよくなってきた。自立して、自分の道を行く決心がついたら、母親の干渉もストレスと感じなくなった。

作品を書き上げながら学生たちはみるみる成長していく。特に最後の数週間は、大人として対等に話ができるようになっていく。そんな学生たちを誇らしいと思うと同時に、もう卒業してしまうのかと、毎年少しだけ寂しく思う。

(本学交流文化学部教授)

ランチタイム研究会を開催しました

「ランチタイム研究会」は、お昼休みを活用し、本学教職員の方を対象として開催しています。4年目となる今年も全8回、学び合いや情報交換の場として、さまざまなご専門・お立場の方にご参加いただくことができました。以下に講師のお名前、およびテーマをご紹介します（敬称略）。

1. 坂田 陽子（本学心理学部教授）、小野 美和（本学福祉貢献学部講師）、渡辺 直登（本学グローバル・コミュニケーション学部教授）、加藤 みわ子（本学非常勤講師）
『「社会における男女のあり方に関する意識調査2016：20年間の変容と今後（その2）」の報告』（5月10日、11日）
2. 大宮 摂子（愛知淑徳職場内保育室長、本学福祉貢献学部准教授）
「どうしてる？仕事と子育ての両立」（6月6日）
3. 川上 綾（本学交流文化学部講師）
「バイリンガル劇団『シアター・イリデッセンス』の試み」（6月19日）
4. 久保 朝孝（本学文学部教授）
「和泉式部の恋の始発～和歌贈答の作法は覆されたか～」（7月10日）
5. 垣内 香里（本学保健管理室保健師）
「月経と婦人科系疾患」（10月24日）
6. 渋谷 典子（本学非常勤講師）
「NPOで働くということ」（12月5日）
7. 佐藤 朝美（本学人間情報学部准教授）
「ナラティブ・語りあいを通して紡ぐ自分の物語」（12月20日）
8. 松井 広志（本学創造表現学部講師）
「ビデオゲームのキャラクターとジェンダー」（1月22日）

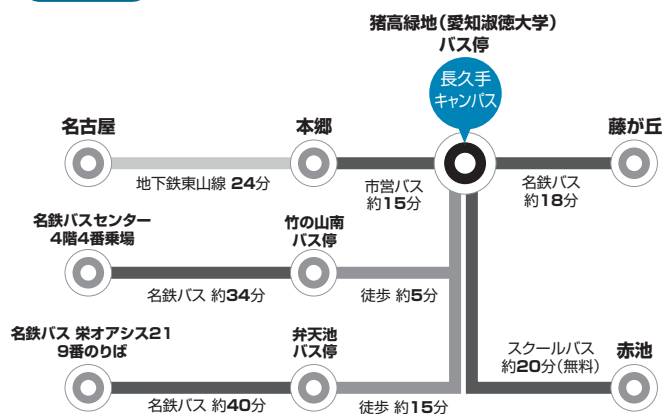
施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です！

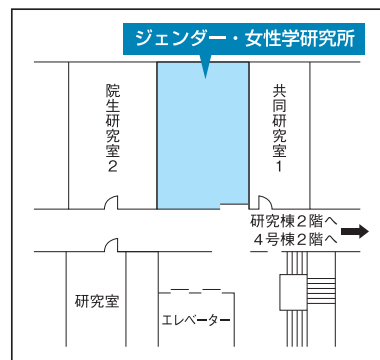
開室日 毎週月曜日～金曜日 **開室時間** 9:00～17:00

場 所 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階エレベーター前

案内図



■長久手キャンパス8号棟 4階



編集後記

恒例の「ジェンダー視点の卒業論文・卒業制作報告会」、今年も無事に開催することができました(p.5参照)。じつは毎回、「今年はちゃんと報告者が集まってくれるかなあ」とドキドキしながらエントリーを待っているのですが、そんな心配も杞憂に終わって嬉しい限り！主体的にチャレンジする学生さんたちの姿に、こちらも励まされました。(中村奈津子)

ASU・IGWS2018年度

運営委員

渡辺かよ子(所長兼) 平林美都子 佐藤朝美
坂田陽子(前期) 高橋昇(後期) 小倉史(前期)
角田達朗(後期) 前田恵子 小野美和 川上綾
藤木美江 赤星泰子(前期) 金南咲季(後期)

事務担当

中村奈津子